

2017年10月19日、当NPOでは、札幌市において「無電柱化の推進に関する法律^{*1}」成立記念シンポジウムin北海道を主催した。2016年12月に法律が成立して以来、東京・大阪・沖縄とシンポジウムを開催し、ここ北海道が4回目の開催となった。会場は400名を超える参加者で賑わった。

シンポジウムの登壇者は、国土交通省北海道開発局、(国研) 土木研究所寒地土木研究所、北海道電力(株)、(一財) 日本みち研究所、登別市、美瑛町、江差町と、多様な立場の人が一堂に会し、他に類を見ないものとなった。

クローズアップ①

北海道シンポジウムを振り返って

「無電柱化の推進に関する法律」成立記念シンポジウムin北海道

NPO法人電線のない街づくり支援ネットワーク理事兼事務局長 井上 利一

識者の講演、基調講演、情報提供

初めに、北海道開発局道路維持課の神田太朗課長補佐が、北海道の無電柱化政策について説明。北海道では昭和61年以降、直轄国道を中心に無電柱化を進めており、現在約50km整備されている。今後も随時整備は進めていくが、防災面で重要な緊急輸送道路などを、限られた予算の中で優先順位をつけながら整備していく予定。また、無電柱化においては低コストで行う方法が検討されているが、寒冷地の北海道では、本州と比べて埋設深度が深くなるなど課題も多い。観光面での景観整備では、羊蹄山の見えるビューポイントでの裏配線^{*2}や電柱をビューポイントではない道路に片寄せすることで低コストに抑える、地中化だけではなく配線方法なども紹介した。

基調講演の石田東生(一財)みち研究所理事長は、「無電柱化と道路政策のイノベーション」というテーマで、社会資本政策と「道」の観点から話された。同氏は北海道開発局と連携して、2003年からシーニックバイウェイ北海道に携わっておられる。地域・景観・観光の三つの要素が連携してこそ、北海道の道路政策が充実することを力説され、それに不可欠な政策が無電柱化であるとのこと。

パネルディスカッションを前に(国研)寒地土木研究所の山下彰司特別研究監が無電柱化の寒冷地特有の問題点と向き合う実証実験の様子を紹介した。例えば氷点下を超える低温でもケーブル配線を通じて電気が滞りなく流れるのか。また、低コストでの景観改善法の紹介や海外の電線類埋設用掘削専用機械(トレンチャー)での実証実験の様子を紹介した。

パネルディスカッション

早稲田大学教授の佐々木葉氏がコーディネーターとして、パネリストの舵取りをされた。佐々木氏は持論も交えながら絶妙なタイミングでパネリストを先導。

美瑛町の浜田哲町長は、景観をまちのブランド化の柱にすることを考え、2003年「日本で最も美しい村」連合をスタートさせた。フランスの「美しい村連合」から発想し、さらに全国の同じ境遇をもつ町村に声をかけ、2016年現在、63町村・地域、サポーター企業は88社に及ぶ。

浜田町長は、これからの北海道はインバウンドと呼ばれる外国人観光客の滞在に対応した政策を進めていかなければいけない、そのためには景観が重要で、美しい景観形成には無電柱化が不可欠と強調。ただ、コ



*1 無電柱化の推進に関する法律

災害の防止、安全・円滑な交通の確保、良好な景観の形成等を図るため、無電柱化を推進する目的で制定された。平成28年12月、公布・施行。国は、無電柱化に関する施策を策定・実施することとされ、地方公共団体は、推進計画を策定・公表(努力義務)することとされた。



ストが大変かかる。ヨーロッパではもっと簡単に地中化の工事・メンテナンスを行っている。今のままでは、無電柱化に100年以上かかってしまうと危惧。今回のシンポジウムで行政の話聞いて少し安心と期待が持てたとも。もっと簡単で低コストの無電柱化を進めてほしいと話す。

江差町歴まち商店街協同組合監事の室谷元男氏は無電柱化がきっかけで町が団結し、町おこしになり、伝統文化が復活したと話す。また「日本で最も美しい村」連合に加盟したことで、他地域との交流も盛んに行われ、人が来るようになったと説明。近隣地域も巻き込んだ活動が伝統文化の復活、町おこしにつながり、さらには住民自らが町をきれいにしようと動き出したという。江差町は、古きよき日本の景観を取り戻すためにまだまだ無電柱化事業も含めた景観形成をやっていかなければと意欲を語った。

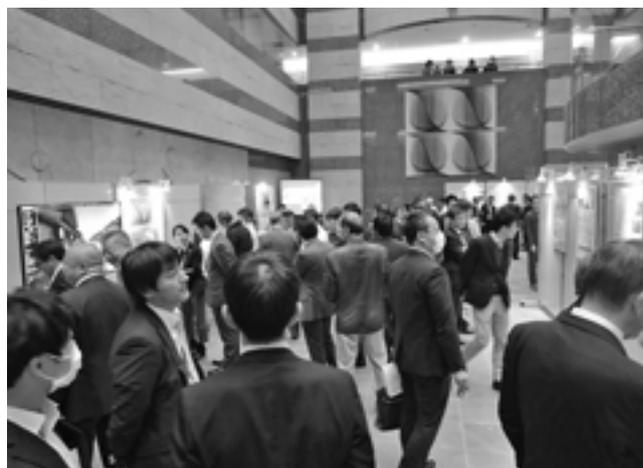
北海道電力流通本部配電部長の奥村敦史氏は、電力を供給する立場として、今では当然と感じるほど「停電はしない」という安定した供給に努めている、これを維持するためには無電柱化は、まだまだ課題が多いと説明。特に冬場の停電は避けなければならない。命にかかわることなので、お客様の苦情も多くなる。また、冬の積雪時に地上変圧器が雪で埋まって見えなくなり、年に数基、車がぶつかり破損してしまう。電柱も同時期に20~40本倒れるが、変圧器1基に比べると格段に安くついてしまうなど、北海道ならではの苦労を話された。

石田氏は、無電柱化を社会資本にどうつなげていくかが重要になる、無電柱化事業が、国土交通行政の中で最重要事項の一つであることが再確認できたと思う。これからは、日本をきれいにする、美化する、それをもって日本を元気にする。その想いで一杯だ。そうしないと日本はよくなる、と語った。

最後に、佐々木氏は「自然環境と道路・橋等人間がつくるインフラ、地域の人に関わってきた気持ちや知恵、三つ全部が揃わないと社会が回っていかない。社会資本整備が「もの」にフォーカスしがちだったのをもう一度もっと広い視点で幅広く議論していかなければならない。しかし、それは、とても面倒臭く、難しい作業になる。ただ、それに踏み込んでいかないと先に進まない。無電柱化すると、誰にでもはっきり効果が見える、その効果はやった人だけでなく、共有財産として子供たちにも伝えることができる、そういう意味でも無電柱化を進めていくことが重要」と締めくくられた。

最新低コスト技術の展示

会場に隣接する展示ホールにて、無電柱化の低コスト技術・製品の展示を同時開催した。休憩時間には、多くの参加者で各ブースは賑わった。



* 2 裏配線

無電柱化したい主要な通りの裏通り等に電線類を配置し、主要な通りを無電柱化する手法。